



	INF	REF	こども	電話	メール	中央計	行徳	BM	南行	信篤	平田	駅南	全館計
5月	733	469	318	7	2	1,529	1,556	41	161	50	116	437	3,890
累計	1,381	919	686	15	11	3,012	3,227	73	348	288	254	921	8,123

INF:インフォメーション・カウンタ REF:レファレンス・カウンタ BM:自動車図書館

📖 今月のレファレンス記録票から

分類

質問と内容

146.1 CDブック『現代思想について』（小林秀雄／講演 新潮社 2004）で、小林秀雄がユングに関して「あるアフリカの山地で土人の風俗なんか、こう、いろいろと調べていたらね、老人に会ったというんです。いかにもこれは老人だという老人に会ったというんだ。」と述べているが、ここで触れられているエピソードが掲載されている著書を知りたい。

小林秀雄が語る表現そのままの箇所は見つからなかった。アフリカでの体験と老人の描写としては、『ユング自伝2』（A.ヤッフェ／編 河合隼雄[ほか]／訳 みすず書房 1973）p.93にアフリカ旅行についての描写があり、「その医師は堂々とした人物というにはほど遠く、ただいくらか涙もろい老紳士にすぎなかった。彼は基盤を侵食され、時代おくれとなり、復旧の可能性もない世界の、次第に拡大して行く崩壊を、生き生きと体現していた。」とある。また、『ユング著作集3』（江野専次郎／訳 日本教文社 1978）p.233には、老齢や死に関する記述に「私は以前、東アフリカの未開種族を訪れたが、白髪を貯え、六十の坂を越したかと思われる人は、ごく少なかった。しかし、彼らはほんとうに年をとっていた。しかも、むかしから年をとっていたかのようにであった。彼らは、これほどまで完全に生きて、老齢に達したのだ。」とある。

アフリカ滞在の記述がある資料は、ほかに、『ユングの生涯』（河合隼雄／著 第三文明社 1994）、『評伝ユング1 その生涯と業績』（バーバラ・ハナー／著 後藤佳珠・鳥山平三／訳 人文書院 1987）、『ユング著作集2』（高橋義孝・江野専次郎／訳 日本教文社 1977）、『ユング伝』（ゲルハルト・ヴェーア／著 村本詔司／訳 創元社 1994）などが挙げられる。

老齢に関連する資料としては、『ユング名言集』（フランツ・アルト／編 金森誠也／訳 PHP研究所 2011）に「幼児的な青年、若者ぶる老人」、「青春は去り老残の身となる」の名言があるほか、『無意識の心理』（C.G.ユング／著 高橋義孝／訳 人文書院 2017）p.121～に年を取ることへの考察がある。

188.5 津本陽／著『龍馬の油断』（文藝春秋 2013）p.55に「江戸芝二本榎にあった高野山出張所」とあるが、この出張所はどんなものか。

『市町村区分による全国寺院大鑑 上巻』（法蔵館 1991）p.441には、「高野山東京別院 高野山真言宗 港区高輪3-15-18」とあり、現在も東京に高野山の別院が存在することがわかる。

『江戸の神社・お寺を歩く ヴィジュアル版 城西編』（黒田涼／[著] 祥伝社 2012）p.62「高野山東京別院」には、「江戸時代から高野山の出張所でした。」と記載されている。

『江戸東京名所事典』（笠間書院 2020）には、地図 p.238「高野山東京別院」に「高野結びふらがしら大師と呼ばれる高野山宿寺」、解説 p.284「高野山宿寺」に「江戸時代は古義真言宗の触頭（寺社奉行の命令を配下の寺院に伝達し、また配下の寺院からの訴願を奉行に伝える役割を担った寺）の役を担った。」とあり、高野山の出張所は、「高野山宿寺」とも言われていたことがわかる。『悠悠逍遙江戸名所』（白石つとむ／著 小学館 1995）p.299には、「高野寺（二本榎正覚院）」「高野山学侶派の在番所なり 世に高野寺といふ」、解説に「二本榎の通りに入る（中略）正覚院は、高野山学侶方の江戸在番所で、現在は高野山東京別院と呼ばれている。」とあり、

「高野寺」「江戸在番所」という表記もされている。

『高野山 その歴史と文化』(松長有慶[ほか]／著 法蔵館 1984) p.246-250 には、江戸幕府と高野山の関係についての記述があり、p.247 には「老分二人宛を交替に江戸在番役に、行人方も新たに組頭六名を選び、二名宛在番を命じ、その統制を強めた。」とある。高野山東京別院の Web サイト (<https://www.musubidaishi.jp/history/> (6/14 確認) でも、沿革について触れている。

915.32 紀貫之の「土佐日記」で、活字で印刷されているものではなく、筆遣いがわかるものがみたい。

貫之の自筆本は室町中期までは伝存したと見られるが、現在その筆遣いを窺い知ることができないのは、転写本のみとなる。自筆本を最も忠実に伝えたと思定される、藤原為家による転写本を親本とした青谿書屋本の原寸大影印本には、『土佐日記』(東海大学出版会 1992 千葉県立図書館所蔵)がある。『校註土佐日記』(鈴木知太郎／著 笠間書院 1970)には、青谿書屋本の写真が1枚掲載されているほか、松木宗綱系統の転写本の影印がある。

940.3 「人生は一冊の書物である。パラパラとめくる～」という詩の全文が知りたい。

『世界名言大辞典』(梶山健／編著 明治書院 2018)の人生についての名言 p.186 に「人生は一冊の書物に似ている。愚者たちはそれをペラペラとめくっていくが、賢者は丹念にそれを読む。」とあり、出典がジャン＝パウル「角笛と横笛」とある。また、『ドイツ名句事典』(池内紀[ほか]／編 大修館書店 1996) p.162-163 には、「人生は一冊の本に似ている。愚かな者は、ぱらぱらとページをめくり、ざっと目を通すだけだが、賢い者は慎重に読む。というのも、この本はただの一回しか読めない、ということを知っているからである。」と、異なる翻訳で原文、解説の記載がある。ジャン＝パウル「角笛と横笛」は、『Horn und Flöte』(Jean Paul, Ernst Bertram Insel-Verlag 1953 国会図書館所蔵)と思われるが、邦訳の出版は確認できなかった。

他にもこんな質問ありました (クイック・レファレンスから)

分類	質問	⇒ 回答、補足事項、溘著など
I/B1	江戸嘉永年間から明治にかけて、市川市島尻に住んでいた網元の宮崎氏について書いてある資料はないか⇒『行徳塩浜と新井村の足跡』(宮崎長蔵／著・発行 1976)を提供	
I/S1	市川市内の道路の幅を知りたい⇒市川市の道路管理課窓口で道路台帳の閲覧及び平面図の交付を行っている。市川市の Web サイトでも閲覧が可能。 https://www.city.ichikawa.lg.jp/roa02/1111000045.html (6/14 確認)	
C10/S4	「千葉県の下水道」のパンフレット(千葉県県土整備部下水道課)の最新版が見たい ⇒千葉県立中央図書館では 2021 年まで所蔵(館内閲覧資料)がある。千葉県の Web サイトでは、下水道事業関連行政資料の電子データでの配布があり、2022 年分を見ることができる。 https://www.pref.chiba.lg.jp/gesui/jigyoushiryou.html (6/14 確認)	
C10/F5	千葉県の組織図が見たい⇒『千葉県勢要覧』に掲載あり。『千葉県勢要覧 令和 3 年度』p.171-172 に令和 4 年度の組織図が掲載されている。令和 5 年度の組織図は千葉県の Web サイトで確認できる。 https://www.pref.chiba.lg.jp/cate/kt/gyouzaisei/soshiki/soshiki/ (6/14 確認)	
782	リレーの最終走者のことを「アンカー」というのはなぜなのか。スターター(starter)やランナー(runner)のように動詞+～する人(-er)なのか⇒『暮らしのことば新語源辞典』(山口佳紀／編 講談社 2008) p.60 に「英語(anchor)からの外来語。この anchor という語は船の錨が本義であるが、(中略)固定させ安定させるものの意や、手段・頼みの綱といった意が派生し、さらにスポーツ関係の語として、リレーの最終走者・泳者をさすようになった」とあり、動詞+～する人(-er)ではないことがわかる。	
K528	児童書でエアコンのしくみがわかるものを探している。⇒『最新モノの事典』(鈴木出版 2009) p.18-19、『こども大百科大図解 キッズペディア』(小学館 2012) p.18、23、『透視絵図鑑なかみのしくみ 家のなか』(六耀社 2016) p.16-19、『エアコンのひみつ』(大富寺航／まんが 学研プラス 2019) など。	